

氏名(本籍)	三宅正彦 (大阪府)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第418号
学位授与年月日	昭和62年12月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	伊藤仁斎の思想史的研究—稿本の分析を通して—
主査	筑波大学教授 芳賀登
副査	筑波大学教授 文学博士 大濱徹也
副査	筑波大学助教授 文学博士 熊倉功夫
副査	筑波大学教授 文学博士 宮田登
副査	筑波大学教授 文学博士 高橋進

論文の要旨

本論文は、江戸時代の古学派の代表的思想家伊藤仁斎の思想史的研究を志したものである。その方法は天理大学図書館古義堂文庫所蔵の根本史料としての稿本の分析を通じて対象に迫ろうとしたものである。それによって仁斎と伊藤家の事蹟を検討し、かつ思想史的研究としての基礎的研究を企てている。

従来の伊藤仁斎研究史を克明に行い、そのうえで東涯の作成した「先府君古学先生行状」を無批判にうけ入れたものの多い中で伊藤家家学を仁斎・東涯一体化としてとらえているものとして批判を加え、仁斎に関する伝記と思想の基礎的考証につとめたものである。

序章「仁斎学研究的課題と展開」では、「語孟字義」や「童子問」中心に行われて来た伊藤仁斎研究を克服して、仁斎の主著を「論語古義」「孟子古義」「中庸發揮」の三書古義に求め、その分析を通して、仁斎の註解の特性を求め、仁斎固有の註釈性を析出したうえで、「古学先生訳文」や稿本の所論等を通して研究を行っている。研究史は4期に分けて考察し、そのうえで筆者自身の研究史上の位置づけを行い、稿本研究の不徹底の現状をふまえて、先行研究の誤謬克服の課題をのべ、自分の行う稿本と刊本の比較研究史にもふれている。それ故に本論文の構成は研究史の位置づけに導かれたものである。

本論文の内容は序章をふまえて第1章以下の叙述よりなっている。第1章は、「伊藤仁斎に関する基礎的考証」と題し、仁斎名号考証をし、元禄2年仁斎号成立を実証し、伊藤家系譜考証で先祖

の不明者の推定考証をなしている。

第2章「思想の社会的基礎」では、伊藤家が堀川辺りの京都根生いの上層町衆で下御霊神社を氏神とし、浄土宗鎮西派信行寺を菩提寺とした在家往生、学問を認める家風を示すことを実証している。

第3章「京都町衆と意識形態」では、京都の町の共同体が、惣町的結合そのものを弾圧され、次第に上意下達の機関化した経緯を明らかにし、往生思想への傾斜の中で、いきがいを家業に求めるより家業遊離の傾向に求めたことを明らかにしている。

第4章「初期思想の史料—古学先生詩文集の問題」では、初期思想の史料「古学先生詩文集」が東涯の校正のものであることを明らかにし、「仁斎先生文集」による批判の中で、仁斎の思想を明らかにできるとし、その稿本間の異同や両者の相異の指摘は詳細を極めて、考証はすこぶる徹底している。

第5章「初期の思想」は、伊藤仁斎の初期思想が朱子学的であるより朱子批判的であり、仏教的思弁に陥り、禅家の白骨観法に沈潜していることを指摘している。

第6章「仁斎学形成の契機」では、仁斎学形成の契機を従来、呉蘇原や羅整庵を模倣していると考えたのを誤りとして訊し、朱子と陸王を併立させ、程明道を媒介とする理気合一的傾向をもつ学説をうちたてたとしている。

第7章「仁斎学の形成」では、仁斎の古義学形成の画期を三書古義著述の初めごろに求めることができるとし、「論語古義」稿本（初本）に焦点をあてて考証している。

第8章「仁斎学の原像—京都町衆における惣町的結合の思想形態」は、三書共十一本が延宝元年（1673）以降、天和3年（1683）以前に成立すると推定され、これにより仁斎学の原像を知ることができるとしている。三書は仁義を基本とし、道徳を素地とする因習補完のもので、鬼神、卜筮説を排除し、そのうえ血脈と意味との相関関係を求めたり、仁斎学の原理を理实在否定の気一元論としてとらえ、理気二元論批判を展開し、四端拡充論を立てている。

第9章「京都町衆の生活規範—仁斎日記の分析を通じて—」は、京都町衆の生活規範を仁斎日記の分析を通して事実的に基礎づけたものである。

第10章「気一元論の成立過程—天道と天と人道の分離」は、気一元論の成立過程を、天道概念と天と人道の分離の理論的展開の中に方法をたどっている。きわめて論理的な追求でもある。

第11章「仁斎学の展開—意味血脈論的方法の発展と転化」は、仁斎学の展開を先述したごとく意味血脈論的方法の発展と転化の中に求め、仁斎学の確立を元禄8年（1695）直前に求めている。従来のものよりは後になっている。それも「論語古義」稿本の存在とその分析の成果による。また、その理論の中核としての意味血脈論的体系の確立もそれとかかわって評価される。ところが東涯は仁斎学に残存する朱子学的所説を捨象して校正を加え、意味の整合をはかっている。そのことが仁斎のもつ意味血脈論的把握を抹消することとなる。なぜこれほどまでして伊藤家家学の整理を行ったのかを考えさせられる。

付篇Ⅰ「伊藤仁斎の経書批判」は、仁斎学の「春秋三伝」等分析を通じての経書批判の方法を示

すものである。付篇Ⅱ『語孟字義』の成立過程とその校異」は、「語孟字義」(林景范刊本)の校正態度の特性を分析したものである。

Ⅰは、事実析出によって、孔孟の血脈は諸子史書の実を否定して新しい血脈の事実を創出している。

Ⅱは、宝永元年ごろ林景范によって伊藤仁齋生前稿本の統一的作成が行われた事実を指摘している。以上のごとき精緻な分析に思想史の基礎作業がきわめて厳密になされてこそ、はじめてその概括的立論が可能となる形のものであることを示している。その意味で本論文は、題名のごときテーマに迫るための基礎的な業績としての到達度が高水準にあることを示している。

審 査 の 要 旨

本論文は伊藤仁齋研究史を4段階に分け、研究史で種々とりあげられた視点からの照射を考えても、そのためになさねばならぬ基礎作業をなし、そのうえに構築した基礎的思想史研究論文といっ
てよい。

本論文は、筆者三宅正彦氏が考えている武家的イデオロギーとしての日本的朱子学家的研究に対し、町人的思想をあらわす町衆的思想家仁齋をとりあげたものであり、そして農民的な思想を安藤昌益に代表させる中でもっとも早くから手をそめた業績である。

そしてその本領とするところは稿本間、稿本・刊本間の比較異同研究の方法を通路とする方法にある。「語孟字義」や「童子問」中心の仁齋研究の批判にある。こうした先行する一般的見解は、仁齋学の体系吟味を行っていない恣意性にあるとしている。

意味血脈論的方法の提示に特質がある。すぐれた論点提示といっ
てよい。適確な考証力をもつとともに内在的論理分析力に富むものである。以上のごときすぐれた点は、三宅氏が思想史家として哲学的認識力に富む素質をもっていることを示している。

ただ、三宅氏の業績が評価されるのは社会機能面での思想の役割、イデオロギー面である。その面
でいうと本論文は第8章を中核として構成されていると読むべきものでもある。この面に関しては町衆の意義と根生いの町人との関係等を含めたり、機能と思想内容の内的関連性の即事実等については疑問とするところがないではない。また、伊藤仁齋の朱子学理解の具体的内容とくに李退溪思想とのかわり合い、理気二元論的理解を気一元論的に傾斜したというとらえ方等にも一考すべきところがないではない。

本論文は、しかし、三宅氏の近世日本思想史の方法を世に示すとともに、その基礎史料を着実にふま
え、かつ精細に分析、稿本等を比較検討した基礎研究として画期的な業績として評価することができる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。